

北東アジア地域におけるアジア共同知と 日本の役割

北東アジア総合研究所所長 川 西 重 忠

1. はじめに

筆者は大学院で講義・研究業務のほかに桜美林大学北東アジア総合研究所(以下、北東アジア総研)を兼任で担当している。北東アジア総研の活動は北東アジア地域研究以外に教育活動、社会活動も行っている。北東アジア地域の学術機関との連携・共創を図りつつ、大学と一般社会との間を取り持つ知的ブリッジの役割を目指している。実際の教育活動としては、毎月1度、月初に行われる月曜懇話会のほか、各種講演会と春と秋にシリーズで開催される特別講義が活動の中心である。

研究面での恒例行事として毎年夏に8月末から約2週間、中国内蒙古自治区のホロンバイル草原一帯の調査視察ツアーを続けている。この視察ツアーは北東アジア総研の会員と一緒にいる。現地ハイラルでは地元のホロンバイル大学と共催で言語・文化・経済の国際会議を毎回開催し、その後、ホロンバイル一帯で中華と周辺を考える調査研究を行っている。今年は総勢10名が参加して、例年通り北京を基点にして、ホロンバイル地区のハイラル、ノモンハン、イミンソンと回ってきた。さらに今年は、帰途には北京で中国を代表する名門大学、清華大学の継続教育学院と初の共催学術会議を開催した。統一テ

ーマは「グローバル化時代における日中の大学と企業」で、今後も随時継続することを約束した。

教育、研究活動は広い意味での社会活動の一環でもあり、これらの活動は終了後には報告書にまとめられて、関係者に配布されている。

2. 東北地域と日本

北東アジア地域は日中韓に北朝鮮、モンゴル、極東ロシアを含めた地域であるが、その中心は中国である。北東アジア総研ではその中国を正面から見すえて中国に向き合うというのではなく、中国東北部周辺地域から中華中央部を見、周辺地域の調査研究を通じて中国と日中関係を考える、というスタンスを取っている。一般に社会人を交えた社会調査・研究ではメイン部分は経済が中心テーマとなるのが通例であるが、北東アジア総研では社会、文化、経済、宗教、言語、政治等関係する諸分野を総合的に捕らえて調査研究を進めている。

ホロンバイル地域の調査では、戦前の旧満州国と呼ばれた日本統治時代に、この満蒙地区でモンゴールの児童・生徒に日本語を教えていた一日本人の教育活動にフォーカスを当てて調査を進めている。

戦後60年経った今なお、この地域の住民は羊を養ってその毛と肉を売ることによって生活を成り立たせている。

イミンソンと呼ばれる地域一帯の現地住民からタシロ先生と呼ばれて慕われている一日本人教師が存在したのを知ったのは3年前のハイラルで開催された国際会議であった。その日本人教師の名前は「タシロ先生」という。タシロ先生に教わった村民の娘や息子たちが、今もタシロ先生を郷土の恩人として尊敬しているのである。

70年前、この地に突然やってきた若いタシロ先生は、一人でレンガを馬車で積んできて学校を作り、そこで校長として地元のモンゴールの少年少女に日本語と日本の生活・文化を教えた。その赤いレンガの学校は、「赤い学校」として今も残っている。

北東アジア総研の研究調査目的は、タシロ先生の生きた昭和初期から戦前、戦中に至る時代の中国東北周辺地域の教育制度と教育者の役割である。タシロ先生の活動の背景も当時の日本の大陸政策と複雑に絡んでいる。

日本の大陸侵攻は近隣諸国に深甚な被害と苦痛を与えた。このこと自体は自明であり疑う余地はないが、一方では大陸各地において地域社会の中で人間相互の間に地元民とのこのような交流が存在したこともまた事実であり、同時に記憶しておく必要があると思う。このことは北東アジア地域においてはとりわけ意味を持つと思われるからである。

3. 日本とインド、日本と中国

最近、世上ではジャーナリストの宣伝のせいもあり、BRICS 地域、特にインドに対する関心が経済界を中心に高まっている。

インドの潜在力の高さと経済成長の発展性を認めることには筆者も吝かではないが、日本とインドは文化、思考様式、生活風土、就業態度において余りにも異質であることを多くの日本人は看過しているように思われる。筆者の見るところ、日本とインドの違いは日本と中国以上である。これはインドを良く知れば容易にわかることである。インドは経済構成において、IT(情報技術)産業が GDP の6割を占め、他の国と違い最初から三次産業が国の経済を先導する国である。天性の数字能力に加え、さらにそれを旧宗主国イギリスの最高の遺産とも言える英語力のレベルの高さと金融機関制度の強さが支えている。ヒンズーやイスラムの信仰が之を内面で規制している。製造業において日中間の思考方法や行動様式の違いの大きさが常に問題となるが、インドの場合、製造業が極めて脆弱で、問題が起こる以前の段階なのである。これらをいくつか挙げてみるだけで日本とインドの距離は、北東アジア地域のアジア的倫理を同じくする日本と中国より地理上だけでなく、文化面においても、また経済の相互補完面においてもはるかに遠いことに容易に知ることが出来る。

もっとも、経済分野においては世界の多国籍企業は市場と雇用を求めて世界を自由自在に資本移動と技術移転をしてゆくものであり、別個に考えねばならないことは付記し留保しておかねばならない。筆者が言いたいことは、インドに対して一部日本人が持っているある種の親近感は一面的且主観的で、かなりリスクを孕んでいるものであることを言いたいのである。たとえば、その一例として、西洋人が持つインド像は、「ベンガルのトラ」という恐怖の裏づけのあるインド像であるが、日本人の持

つインド像は「インド象の穏やかなインド」の像である。この2つのインド像を比較するだけでも日本人一般のインドに対する理解の浅さと短絡性がよく表れている。

4. アジアの共同知

さて、最近中国で『為新中国做出贡献的日本人 友誼鑄春秋』(2巻、新華出版社、2002年9月)が発行された。1年後には日本版が『新中国に貢献した日本人たち 友情で綴る戦後史の一コマ』(正統2巻、日本僑報出版、2003年10月)の題名で出版され、関係者の間で評判となった。この書によると実に多くの日本人が、1945年以降にも中国解放戦争に参加し、新中国建設後も残って中国人民の社会主義革命と建設を助けたことが記述されている。多くの日本人が新中国の建設と発展に青春を燃焼させ、努力と英知を傾注し、中には尊い命を捧げた人もいる。新中国のために中国人民と共に戦い、周囲の中国人から信頼されていた日本人の事績が綴られている。この書は中国中日関係史学会が編纂出版した2冊本である。筆者は10月訪中時に旧知の友人で編者の一人である中日関係史学会副会長の朱福来氏より贈呈を受け、内容を知ることが出来た。執筆者には朱福来氏のほか、元文化副大臣の劉徳有氏、同じく副会長の張雲方氏などが数多く寄稿している。古い友人である著名学者の王曉秋氏(北京大学教授、中日関係史学会副会長)にもこの分野の著書のあることを本人から聞き知った。このような日本と日本人に対する報告と日本人観の見直しはこの3、4年の中国に現れた顕著な変化である。

最近、神戸大学の王可教授は「アジアの共同知」という言葉を唱えている。この実

例として「魯迅と藤野先生」を挙げている。魯迅は青年時代に、日本に留学し、仙台医学専門学校で医学を学んだ。このときの先生が藤野先生である。藤野先生は中国から来た、この日本語の十分でないまじめでおとなしい留学生の魯迅を、懇切熱心に指導した。後年かなり経ってから、魯迅はこの時の思い出を「藤野先生」という小文に発表した。藤野先生の写真は常に魯迅の机の上におかれ、それを見るたびに若年時、異国の地日本で教わった藤野先生を思い出し奮起した、と記している。魯迅と藤野先生は、その後生前には2度と会うことはなかったのであるが、魯迅にとっては、終生の師であり続けた。王可教授は、このようにいくつかの例を提示しながら、日中の「共同知」概念を提唱しているのである。このような学問上のキーワードの提示は多くの不備、欠点も併せ持ち、最初であればあるだけ学者研究者からも批判が多く起こるものである。確かに王可教授の結論に導く手法と蓋然性の提示方法には筆者もある種の危うさを感じはする、しかし、このように全人間性を存在を介在とした精神世界を共有する「共同知」概念を提唱する王可教授の姿勢と勇気を筆者は高く評価するものである。

5. 満蒙における日本人教師 タシロ先生

タシロ先生の来歴と生前の活動事跡については、この2年間の調査でかなりの部分が解明されてきた。タシロ先生の名前は「田代正巳」といい、佐賀県多久郡の人である。教育者の家系ではあるが本人は教育界の世界に身を置いた人ではない。佐賀は江戸時代の肥前と呼ばれたときから葉隠れ武士道の藩で知られ、尚武の気風が残っている。さらにこの多久の土地には

全国でも有数の孔子廟があることでも知られている。多久で生まれ育った田代先生の精神に儒教的な人生観が刷り込まれ影響を与えたことは容易に想像される。

田代正巳氏は戦後、大陸から復員後は地元多久の町会議員、農協の責任者として家業の農家の傍ら、地元尽くしている。そのような中、40年ぶりに届いた満蒙の教え子からの突然の便りに、氏は狂喜し、そのモンゴール語で書かれた手紙を持ち歩いては親戚・友人に見せては顔を輝かせながらイミンソン時代の子供たちのことを説明していたという。しかし“好事魔多し”、返事を出す直前に心臓発作で急逝する。

タシロ先生の遺志をついで満蒙行きの準備をした喜志枝夫人も出発直前に亡くなる。その後、妹の美佐子さんご夫妻がようやくタシロ先生のゆかりの地イミンソンを訪ねたのはそれから16年後の4年前である。喜んだイミンソンの人たちは牛を一頭つぶして夫妻を連日歓迎したという。

6. 終わりに代えて

最近、「竹内実先生中国語版全集出版記念！日中記念シンポジウム」出席のために国際交流基金の招請で北京に行ってきた。日本人で中国語版の学術全集が出たのは稀有のことである。中国人でも生前は選集であり、亡くなって初めて全集が出る。日中文化交流史に残る快挙であると思う。筆者はこのとき、「ビジネス界から見た竹内実先生」のテーマで報告した。竹内実先生自身がビジネスに関係したというのではなく、ビジネス界に与えた影響の例を中心に報告した。

約1万人いるといわれる日本の中国学者及び中国専門家の中で、欠けているのは

体系的、総合的に中国を把握してそれを分りやすく提示できる人が少ないということである。竹内実先生はこの数少ない一人であり、中国ビジネスで働くビジネスマンと一般社会人が中国を理解するうえで重要な役割を果たした。

自らも現場のビジネスマンと接触、交流を好んで行い、それを次々と竹内中国学の中に体系的に取り入れて生氣あるものとし、ビジネスマンと社会人に伝えられていった。この「実事求是」の精神が竹内実先生の際立った特徴であり且つ竹内中国学の学風であると思う、というのが筆者の報告の骨子であった。

中国ビジネスとの関係で述べると、中国東北地域は歴史的にも日本と関係が深い地域である。この地域の経済発展は、新中国成立時は重工業が集積し全国有数の経済発展地域であったが、改革開放後は沿海地域の後塵を拝している。しかし最近の動きとして高騰を続ける沿海地区の従業員給与の圧迫もあり、東北地域へ経済拠点を移す企業が出てきた。日本企業では小島衣料がその一例である。東北地域は、産業構成上も国営企業が集積し改革が他の地域より遅れているのが現状である。近年、中国政府が西部大開発と共に東北地域振興政策を打ち出したのは日本及び日本企業にとって絶好のシグナルである。小島衣料に続く日系企業の出現を後押ししたいものと思う。

中国をどう見るかは隣国日本にとって永遠のテーマであるが、民間レベルで人と企業の交流と理解を不断に継続して行くしか現実的には妙案がないのも事実である。北東アジア総研の活動もこの一環に沿った、人の顔が見える学術社会活動を引き続き展開してゆきたいものと思う。